

[招待論文]

オーラル・ヒストリーメソッドの再検討 発話シーケンスによる対話分析

Re-examining Oral History Method

Dialogue Analysis of Utterance Sequences

清水 唯一朗

慶應義塾大学総合政策学部准教授

Yuichiro Shimizu

Associate Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

諏訪 正樹

慶應義塾大学環境情報学部教授

Masaki Suwa

Professor, Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

Abstract: 近年、質的研究の分野では、オーラル・ヒストリーをはじめとして、様々な形態のインタビューが広く用いられている。しかし、その方法論は豊富な経験を持つ研究者たちが経験に基づいて構築したものであり、初学者をはじめ多くの実践者にあまねく有効かどうかという疑問があった。なにより、従来の方法論は聞き手の側に寄りすぎる嫌があった。

よって、本研究ではあらためてインタビューを聞き手と話し手のコミュニケーションとして、両者のコラボレーションとして捉えなおし、聞き手の発する質問と話し手の応答の関係をシーケンスに整理して分析し、従来の方法論を再検討しつつ質問を軸とする発話の効果を明らかにする。

ケーススタディとしたインタビュー分析からは、第一に従来の方法論が指摘する聞き手の主観が話し手の語りを与える影響を認める一方で、話し手が自らの主観を語るうえでは大きな効果が期待できること、第二に聞き手が仮説を提示する際にはその質がその後の語り大きく影響すること、第三に両者の関係性は回を重ねるごとに変化し、第三回目まで深い語り広がる可能性があることが見出された。

Interviewing is used widely in qualitative study, but its traditional method has relied on experiential knowledge or anecdotal techniques too much. Whether or not those techniques are effective has been rarely validated. The present paper is a challenge to demystify what really constitutes experiential knowledge on interviewing or examine the effectiveness of the anecdotal techniques. For this purpose, we have analyzed the relationship between questions by interviewers and answers by an interviewee, seeing interviewing as a communication between an interviewer and an interviewee or a collaborative work by both. This is a case study in which the interviewee is a restaurant owner in a town near our university. From intensive interviews (3 times and 2 hours per one time), we have found out

interesting evidence suggesting that part of experiential knowledge or anecdotal techniques is not necessarily sound. First, the traditional method was based on a belief that subjective opinions of an interviewer affect the interviewee too much, and therefore should be inhibited. Our evidence, however, shows that subjective opinions of interviewers encouraged the interviewee to open his mind and talk about his thoughts from the bottom of his heart. Secondly, related to the first evidence, interviewers should be cautious to show their hypotheses to the interviewee. Presenting hypotheses sometimes stirs up a feeling of discomfort to the interviewee or sometimes leads to a fruitful response by the interviewee. The latter were cases in which the presented hypotheses were good matches to the interviewee's thoughts or life philosophy.

Keywords: オーラル・ヒストリー、インタビュー、ライフストーリー、学び、身体性

1 はじめに一オーラル・ヒストリーメソッドの現状と課題

近年、質的研究の手法として「聞く・聴く」ことが改めて脚光を浴びている。だが、いつといった確定しやすい情報にくわえて、なぜ、どうやってといったより質的な情報が重視されてきたこと、文字資料ではわからない文脈や意識、そもそも文字資料がない部分などを理解するまで研究が深化してきたことがその理由に挙げられるだろう。「聞く・聴く」ことは、その高い汎用性からさまざまな分野で用いられるようになった。

オーラル・ヒストリーはその代表的な方法といってよいだろう。政治学では政治家、官僚、省庁、地方自治体、経済学では財政家や経営者、社会学では地域文化や戦争体験などを対象に大がかりなプロジェクトが進められてきた¹。近年では芸術や科学、医学、建築学といった分野にもその裾野は広がっている。

もっとも、「聞く・聴く」手法は、その汎用性ゆえに他の方法を用いる研究者たちから多くの批判に晒されてきたことも事実であり、それに応えるかたちで方法論をめぐる議論が深められてきた。オーラル・ヒストリーの分野ではトンプソン (Paul Thompson, 2002)、御厨貴 (2007)、ヤウ (Valerie Raleigh Yow, 2011) などがそれぞれの成果をテキストにまとめ、メソッドの習得を目的とするワークショップも各方面で展開されている²。そうした議論を経て、「聞く・聴く」手法は方法として確立する時期を越え、幅広く活用されるステージに進んでいるのが現状だろう。

しかし、そこにはいまだに大きな方法論上の課題があるように思われる。オーラル・ヒストリーメソッド自身、もしくはそれが大きく依拠してきた質的インタビューの方法論のいずれもが、研究者たちの実践知による経験的なものであり、実証的な検証を受けていないことだ。裾野が広がり、エビデンスが量的に充実する一方で、その質的な問題が指摘されるようになってきたのは、この点と無縁ではないだろう。

これは第一筆者・清水が、オーラル・ヒストリーのワークショップや講義を行うなかで感じてきた疑問でもあった。ある熟練したインタビュアーが導いた経験則は、そのまま初心者に応用できるのだろうか。今教えている経験則は、果たして一定程度以上の普遍性を持って捉えることができるのだろうかという不安である。

もちろん、経験的な方法論をやみくもに否定するつもりはない。先駆者が積み上げてきた経験則はそれ自体が知の体系として丹念に組み上げられたものである。具体的な経験に基づくエピソードは理解しやすく、方法を知るうえで有用であることも疑いがない。しかし、わかりやすいということは、それだけ語られない感覚や知見が捨象されていることも示唆している。それを習得するにはそれなりの蓄積が必要であり、安易に真似をすることは予想外の失敗を生む可能性がある。

同時に、ひとくちにオーラル・ヒストリーといってもその目的は様々である。政治家や官僚といった公人を相手にすることもあれば、きわめて高い価値の経営ノウハウを持つ経営者に話を聞くこともある。話すことに慣れた著名人を訪ねることもあれば、不慣れな市井の人に聴くことも多い。しかし、多くの場合、経験則を描く研究者たちは自らの専門や目的に沿ったインタビューを積み重ねてきたのであり、分野や対象に由来する偏りがあることは否定し得ない。その偏りを認識して議論する必要があるだろう。

そうした多義性のなかでも共通して論じられてきたことがある。まず、話し手との関係を形成するための心構えや話し手の発話に対する反応の仕方といった、聴き手としての姿勢にまつわるものが挙げられる。いずれの方法論でも、この点は重点的に議論され、心理学やカウンセリングの知見が豊富に援用されてきた。

しかし、そこで論じられてきたのは聴き手の側の姿勢であり、話し手との相互関係が包括的に検討されることはなかった。そのため、それぞれの分野における望ましい姿勢と「よい質問」が説かれる一方で、どのような問いに対してどのような反応が示されるのかという質問と応答の関係図は描かれなかった。その結果、聴き手は直感と経験のみに依拠して聞き取りを進めなければならないのが現状である。聞き取りがある種の「芸」であるといわれること、つまり優秀な聴き手だけが持ちうる身体知とされてきたのは、豊富な経験則という教材に依存するあまり、話し手と聴き手、質問と応答の相互関係がしっかりと分析されてこなかったことの帰結ともいえる。コミュニケーション分析においても話すことと聞くことの相互関係について包括的なアプローチの必要性が強調されている (Burgoon, et al., 1995; Holtgraves, 2002)。

もうひとつ、普遍的な質問のあり方として、「こうすべき」「こうしてはいけない」という技法、もしくは禁忌がしばしば説かれてきた。価値中立的な質問をするのがよい、話し手の語る内容に意見をしないとといったものが代表的な例であろう。

たしかに、その聞き取りが客観的な「事実」の獲得や確認を目的とするものなら、これらの技法や禁忌は有効なように思われる。しかし、すでに見てきたようにオーラル・ヒストリーと総称してもその目的はそれぞれに異なる。分野だけでなく、研究の目的によっても、あるべき質問のかたちは変わってくるだろう。目的が異なり、立ち位置が異なれば、当然にして相応しい聴き方も変化すると考えるのが自然だろう。

2 研究の方法—身体知の観点から

経験に依拠したオーラル・ヒストリーの方法論を検証するためには、オーラル・ヒストリーを聴き手と話し手の双方向的な関係性と捉え、やりとりをデータ化して研究する必要があることに気がつく。本稿はそうした観点にたち、話し手と聴き手、発話と応答の関係性を分析し、その見取り図を描こうとするものである。

この課題に取り組むためには、材料を取りまとめるためのオーラル・ヒストリーの経験と、関係性を分析するための認知科学の見解が必要となる。そ

のため、本研究は政治学と歴史学の分野からオーラル・ヒストリーに取り組んできた清水（清水，2009）と、認知科学の分野から「一人称研究」³に取り組んできた諏訪（諏訪，2013；諏訪 et al., 2013）の共同研究として実施した。このことは、単に分析手法の多様化だけでなく、これまでのオーラル・ヒストリー研究とは大きく異なる性質をもたらした。それは、「聞く・聴く」方法に取り組む者にとって避けるべき、もしくは禁忌とされてきた方法をも分析材料に加えられたことである。聴き手と話し手のコミュニケーションは、相互が身体化している「聴く」「話す」という行為の積み重ねに依っており、練度の高い聴き手は、意識的であれ、無意識的であれ、それぞれの分野における「こうすべき」「こうしてはいけない」といった固有の聴き方のルールが身体化している。これでは網羅的なスタイルの発話はできない。この両名が聴き手となり、共同研究に取り組んだことで、そうした偏りを一定程度克服することが可能となった。

研究は大きく三つの段階に分けて進められた。まず、聞き取り調査とスクリプトの作成である。両名の関心に照らしてテーマを土地と仕事を通じて話し手のライフストーリーを知ることとし、神奈川県藤沢市湘南台で35年近くにわたって人気飲食店を営んできたオーナーシェフに聞き取りを依頼した。聞き取りは昼食客が落ち着く午後の時間帯を選び、2013年7月10日、30日、8月27日にそれぞれ2時間強のペースで行った⁴。

聞き取りに際しては清水が作成した資料をもとに両名で事前打ち合わせを行い、終了直後には30分程度のフィードバックを行い、その段階での印象を記録して次回に向けた方針を定めることとした。ただし、実際の聞き取りにおいては、事前に立てた方針に忠実に従うという拘束は設けないこととした。

インタビューをコミュニケーションとして捉えることを基本的な考え方として据えて、インタビューメソッドの再検討を行うためには、まず話し手との間によい関係性（ラポール）を形成することが肝要である。ラポールとはエスノメソドロロジーや文化人類学の分野で提唱された概念であり、インタビューに本音を語ってもらうための必要条件と考えられている。そこで、先行研究で述べられてきた聴き手としての技法はあえて意識せず、現前のトピックと話し手の話しぶりを損ねないように留意しながら、リアルタイムに場の雰

囲気を調整したり、話の展開を促すことに徹した。もちろん、話を展開させる際には、事前に立てた方針に近づける意識は持った。

分析の材料となる書き起こし（スクリプト）は、オーラル・ヒストリーの経験が豊富な若手研究者に依頼し、できるかぎり語りの実態に沿うために、文体は整理せずに作成してもらった。分量は第1回26,525字、第2回31,183字、第3回25,123字で合計82,831字となった。

ついで、発話と応答についてそれぞれ分類を行った。聞き手側については全ての発話をその意図と形態に基づいて分類し、話し手の反応は本研究の関心に基づいて、話し手の考えや評価が含まれるものを抽出して、内容に基づいて分類した。この分類を基に、スクリプトの各発話文冒頭に分類記号を付して、やりとりの流れを可視化した発話分析スクリプトを作成した。

最後に、この発話分析スクリプトを用いて、発話の連なりと応答の関係性を見るための「発話シーケンス」を作成した。これまでの研究では、聞き手の姿勢や「よい質問」のあり方が議論されてきたが、そこで示されているのはきわめて抽象的な「姿勢」や、単発の「よい質問」であった。これに対して本研究では、ある応答を導き出すにはそれに至るまでの発話の積み重ねがあると考え、この連なりをシーケンスと捉えて分析することとした。関係性を考えるにあたっては、KH-Coder（樋口，2014）を用いてジャカード係数を算出し、共起関係を見出して検討を進めた。

以下、まず、聞き手の発話と話し手の応答をそれぞれ機能別に分類し、それに基づいて質問と応答の構造を析出する。そのうえで、従来の経験則に由来する方法論を検証し、最後により大きな聞き取り全体の流れを検討する。

3 聞き手の発話技法を分類する

3.1 「雰囲気をつくる」発話と「話を展開させる」発話

まず、聞き手の発話を分類する。質問の類型についてはすでにヤウが「問題を掘り下げる質問」「フォローアップの質問」「理由を尋ねる質問」「明確化を目的とする質問」「仮定の質問」「比較を用いた」「挑戦的な質問」と、7つの類型を示している（ヤウ，2011）。ヤウ自身の豊富な経験に基づいた、きわめて実践的で、いかにして「よい答え」を引き出すかという目的に即した質問

の類型が示されている。

しかし、ヤウの分類があくまで聴き手の側の意図に基づいたものであることには注意が必要だろう。オーラル・ヒストリーが聴き手と話し手の相互関係から生まれていく以上、聴き手の意図に加えて話し手の意思も勘案して考えるべきだろう。近年は、ホルスタイン(James A. Holstein)とグブリアム(Jaber F. Gubrium) や桜井厚に代表されるように、聴き手と話し手を厳密に区別するのではなく、より積極的に両者のコミュニケーションを図る手法も提示されており(ホルスタイン・グブリアム, 2004)(桜井・小林, 2005)、さらに踏み込んで聴き手と話し手の共創を提案する研究も現れてきている(忽滑谷・諏訪, 2012)。また、聴き手側の発話は一般的な意味での「質問」に止まらない。聴き手は話し手との関係性(ラポール)を構築するなかで、相槌に代表されるように、直接的な質問ではないさまざまな発話を行っていると考えられる。聴き手両名は、2章で述べた方針のもと、先行研究で述べられている聴き手としての技法を意識することなく、関係性の構築のために良かれと判断した聴き方を繰り返している。

そこで分析においては、聴き手の全発話を対象に、聴き手の発話にどのような種類が存在するかを分類した。その結果、聴き手の発話は「雰囲気をつくる」ものと「話を展開させる」ものに大別できることを見出した。それを一覧にしたものが表1である。

話し手から「よい話」を引き出すことに重点を置いてきた従来の観点では、話しやすい雰囲気を作る姿勢は重視されてきたものの、それは傾聴マーカーに代表される姿勢の重視に止まり、発話のレベルで検討されることはなかった。しかし、単に「話を聞いている」というサインだけではなく、発話を軸に様々なコミュニケーションが展開されていると考えるべきだろう。これらの発話として、「驚きを示す」から「進行する」まで8つの分類が得られた。

「話を展開させるもの」は、話し手の考えを深く掘り下げ、本音の意見表出を促す発話である。その意味ではヤウと同じターゲットを再分類していることになるが、ヤウの分類が経験に即して内容と手法を混在させているのに対して、本研究では発話の効果を検証するため方法に分けて整理し、「ダイレクトに尋ねる」「呼び水とする」「背景を考えさせる」という副分類を設けた。「呼

表1 聴き手の発話分類

雰囲気をつくる	話を展開させる	
驚きを示す	ダイレクトに尋ねる	呼び水とする
共感を示す	理由を質問	主観的な意見
理解したと示す	仮説を提示	客観的な意見
強めに言う	アスペクトを提示	
筋に乗って押す	具体物を提示	背景を考えさせる
言語化を手伝う	オウム返し	
テーマを合意する	トピックを再登場	空間を連想させる
進行する	温度ある言葉を拾う	
	それ以外（普通）	時間／歴史を連想させる

重要だと判明したもの

「呼び水とする」とは、聴き手の提示したトピックについて語って欲しいわけではなく、それから連想して何かの発話を促す聴き方を指す。

後述する共起分析で明らかにすることであるが、本研究では、表1において濃い網掛けで示した聴き手の技法が重要であるという知見を得た。「仮説を提示」「主観的な意見」「具体物を提示」などは、話し手を誘導したり影響を与えたりするという意味で、従来のインタビュー研究では禁忌とされてきたことである。

3.2 「雰囲気をつくる」発話

「共感を示す」発話は、話し手の語りに対して聴き手側が積極的に共感を示すことで、さらにその話題を深めるものである。たとえば、以下のような例が挙げられる。

話し手 いま新しい人がキッチンに入っているんですけど、なぜおいしいか、なぜまずいかというのは、同じでしょ、という話になりました。原因を探そうよと。

聴き手【共感】 面白いな。エビを殻つきのものにして、殻をむく作業をしているときに、なんかうま味のことを考え始めていく。すごく面白いですね。手から、だんだんアイデアが入ってくるというような話ですね。

話し手 やっぱり、隠し味について、いろいろ考えていたんですよ。一体なんだろうと。隠し味をする理由は旨くなるからだと思うんです。ここの隠し味はなんだと言ったら、タラコとかを入れて増すこと、プラスになるということだと思うんですよ。だけど実際は、その味はしない。しないけど、あったらプラスになっている。そこが隠し味だと思うんです。

この段階ではまだ話し手は、おいしさの原因を探していく意識は持っているものの、それを明確に言語化するまでには至っておらず、冒頭では今の取り組みに触れるに止まっていた。それに対して聴き手が「面白い」と共感を示し、それまでの話し手の語りを再話し、話し手にさらなる言語化を促している。

「共感を示す」が発話による傾聴マーカであるのに対し、「筋に乗って押す」は、その話題に興味があることを示して、話題を継続したいというシグナルを聴き手が話し手に向けて発する行為である。

話し手 湘南台はやっぱり都会ではないですよ。でも、緑がたくさんあるというわけでもない。どちらかと言えば、グレーのイメージじゃないですか。僕はあまり好きじゃないですね。たしかに最初の方は、湘南台公園も広がったし、森になっていましたから。木が少なくなりましたよね。

聴き手【押す】 前回、道を広げたときに木がなくなると仰っていたのは、とても印象的でした。

話し手 まず真ん中に木が植えてあって、それをはずして道をつくりましたから。木のイメージがなくなると僕はあまり好きじゃないみたいですね。

街の景観について話を聞くなかで、話し手から「グレーのイメージは好きではない」という主観が示された。これに対して聴き手は、さらにその主観について話してもらおうべく、それまでの話し手の語りから類似する内容を取

り出して提示した。すると、かつては緑に溢れていた街が、開発によってコンクリートのグレーになっていったことを残念に思っているという考え、価値観が具体的に引き出されることとなった。

3.3 「話を展開させる」発話

話を展開する技法は数多くあると考えられるが、なかでも聴き手の側から具体的なイメージを提示する方法は、後述するように、その有効性が確認された技法である。抽象的な質問ではなく、あえて聴き手の視点から具体的なものを提示することで、話し手は自らが語ろうとするものの特徴を描き出すことができるようになっていった。従来のインタビュー研究では、話し手を誘導するとして禁じられてきた技法に属する。

聴き手【具体】 イカもつかっていた。スルメイカですか。

話し手 スルメではなかったですね。ムラサキイカ。

聴き手 ムラサキイカ。

話し手 でかいですよ。広げるとこれくらいありますよ。

聴き手【具体】 一匹まるごと仕入れてくるのか。足とあれば。

話し手 足はつかってないですよ。広げた状態で。加工されてても生ですから。

聴き手 生だけど足はとってあるんですね。わりと歯ごたえがありそうな感じですね

話し手 やわらかいですよ。そこが好きで。じゃあスルメみたいにおいしい味がするかというとそんなでもないんですけど。なんていうんですかね、意外とさっぱりとしています。僕は好きです。

従来からのメソッドに従えば、冒頭の発話は「イカはなにを使っていますか」となるだろう。しかし、あえてスルメイカを具体的に提示したことにより、話し手はなぜスルメイカではなくムラサキイカなのかを雄弁に語ってくれた。その流れでさらに聴き手の主観的な「歯ごたえがありそう」というイメージが提示されたため、話し手はそうではなくやわらかいのだと話を展開している。

抽象的な質問を意識して「生だけど足は取ってあるのですね」というところで発話が止まっていた場合、このようには展開しなかつただろう。

もうひとつは、聴き手の主観を押し出す方法である。これは従来からの「聞く・聴く」をめぐる方法論のなかでは、聴き手の側が持つ仮説に強く惹きつけ過ぎる恐れがあるとしてタブー視されてきたものである。

話し手（常連は）後の方がより、ボリュームが多くなりましたね。しかも体育会系というか、真面目な体育会系ですよ。

聴き手【主観】 いまでも学生の間では、可愛くケーキを食べたいときにはAに行って、ガッツリと食べたいときはこちらにくる、というような感じはありますよね。

聴き手【主観】 スパゲッティ大好き派としては、世の中のスパゲッティの量が少なすぎて困っているんです。

話し手 たしかにそうですね。なんとなくわかるんですよ。なぜ通常のパスタが80グラムかという、パスタの他にもっと食べて欲しいからなんです。80グラムでは足りないじゃないですか。それはつまみとしての80グラムで、ほかにサイドメニューを頼んで欲しいんですよ。でも、うちは一品でいいと思っているんです。一品で完結すればいいと思っているんです。

常連客の食べ方について話が進むなかで聴き手から発せられた主観は、一見するとやや話の筋から外れた、主張に近いものであった。しかし、このままであればよく食べる客が店に付いたという状況的な語りになるところで、パスタのボリュームに視点が移った。聴き手の側の主張は食べる側のものであったが、それに対する応答として、話し手は作る側の一般的な意識を説明し、その上で、なぜ自分の店のパスタにはボリュームがあるのかという哲学を示した。聴き手が強い主観を述べたことで、状況についての語りや、意識についての語りにシフトしたのである。たしかに主観は語りのありようを左右するが、それは同時に話題や切り口、深度を変化させる大きなきっかけともなることがわかる。

4 話し手の応答を分類する

次に、話し手の応答を分類する。話し手の応答はまず、「事実を叙述する」ものと、「主体的な意見や考え」に分けられる。文書資料では知ることのできない経験や認識を得ようとするオーラル・ヒストリーでは、前者に劣らず後者の情報が重要となる。本研究は話し手のライフストーリーを聞き取ることを主眼としているため、後者にも注目して分析を進めた。

4.1 定型の語り

では、話し手の「主体的な考えや意見」に分類された語りは、さらにどのように分けられるだろうか。(表2)

話し手が主体的に経験や意見・考えを語る場合、しばしばでき上がったストーリーが語られることがある。とりわけインタビューに慣れた著名人の場合にこの傾向が見られる。すでに何度も話したことがあり、話のストーリーができあがっていて、それを語る言葉のセットも固まっているケースだ。これを「定型の語り」とする(清水, 2009; 諏訪 et al., 2014)。この場合、何度も語ってくるなかで、記憶の美化や誇張、情報の取捨選択が行われている恐れがある。それだけでなく、定型の語りが出てくると、その後の展開がどうしても限定的になる。完成された語りであるために、それだけで話として完結しているからだ。定型の語りの例を見てみよう。

聞き手 前回もおっしゃっていましたね。匂いの強いもの同士をあててみると。あれはアサリが先にあって、セロリを合わせるって

表2 話し手の応答—経験や認識

1: 定型の語り口 (頻繁に使う言葉の セットやストーリー展開あり)	いま探索・生成(非定型)	
観察ポイント: 食い気味に語りだす 喋り方がすらすら 声のトーンが張る 「結局」「要するに」 「やっぱり」	2: 言葉を探す (主張は定型)	3: 主張をいま 生成
	観察ポイント: 喋りだしに間がある 喋る最中はすらすら 声のトーンが張る	観察ポイント: 喋りだしに間がある 喋る最中も間あり 喋り後半はすらすら 声のトーン抑え気味

う形なんですか。

話し手【定型】メニューを作るときにどのような野菜を使うかというのが自分のテーマになっているんですよ。野菜が入っていないものもありますけど、どの野菜がおいしく食べられるか、というのが僕のテーマなんです。

4.2 非定型の語り—「言葉を探す」「主張を生成」

定型の語りではない場合には、その場で言葉や表現を探すケースと、考えをまとめるケースの2つがある。前者は、常日頃よく考えていることではあるが、言語化したことが少ない、つまり、それを表現する言葉のセットが決まっていない場合である。これを「言葉を探す」と呼ぶ。後者は、話す意見や考えそのものもインタビュー中に考え出す場合である。当然、それを表現する言葉もリアルタイムに探すことになる。これを「主張を生成」と呼ぶ。非定型の語りは、定型の語りよりも生煮えの状態で語りが進み、その後の聴き手の促し方によっては、より多様な語りを引き出せる可能性を含んでいる。

話し手の発言が「定型の語り」かどうかを判断することは難しい。聞き取り後にすべての発話に関して本人に確かめることは、時間的な面でも、話し手の精神的疲労の面でも現実的ではない。そこで本研究では、話し手の話し方に観察可能な指標を挙げ、それに基づいて上述の3種類を分別する推定基準を設定した。決して検証可能ではないが、尤もらしい基準であると考えている。

注目するのは、発話する際の間と、話のスムーズさ、そして声のトーンである(諏訪 et al., 2014)。定型の語り口を披露する際には、聴き手の発話の後半辺りから、「この発言に対してはあのことを話したい」と考えるだろう。したがって、話し手はほとんど間髪を入れず、もしくは聴き手の発話にオーバーラップしながら話をはじめることになる。言葉のセットが決まっていることから、話しによどみや間はなく、声のトーンも張り気味になるであろう。録音した話し手の話し振りを精査し、これらの条件すべてに合致する場合に、「定型の語り」であると判断した。

非定型の発話の場合は、聴き手の発言が終わってから話し出すまでに間があるだろう。そのなかでも途中からはすらすらと話し、声のトーンも張って

いる場合は、すでにまとまっている考えを表現する言葉のセットが見出されたものと捉え、「言葉を探す」であると分別した。最初の間は、どういう言葉でしゃべろうかを考えている時間であろう。それに対して、途中にも間があり、声のトーンも抑え気味である場合は、考えそのものを探求していると捉え、「主張を生成」であると分別した。

5. 対話の構造を分析する

5.1 発話シークエンスの作成

対話構造の分析には、まず発話と応答の連なりを明らかにする必要がある。本研究は話し手が主体的な考えを述べるまでの流れを見出すことを目的としているため、「話し手の主体的な意見や考え」を終端とし、そこから遡ってトピックが同一の発話の塊をひとつのシークエンスと捉えることにした。これを発話シークエンスと呼ぶ。具体的には、3・4章で行った分類に基づき、話し手が自らの考えを述べるまでにどのような分類の発話が聴き手からなされるのか、その連なりを見出した。例えば次のような例が挙げられる。

聴き手【主観1】 エビの殻をむいたときに手についているコレがうまいんじゃないかっていつも思うんですけど。

話し手 そうなんですよ。

聴き手【主観2】 ふきたくない、なめたい（笑い）。

話し手【主体的考え1】 そうなんですよ。殻のどこがおいしいかなんて、普通はあんまり考えないじゃないですか。考えるのかな。だんだん考えるようになりますよね。

聴き手【主観3】 僕も時期を同じくして、学生になってパスタが好きなんだって気づいて食べ歩いてから気付き始めました。

話し手【主体的考え2】 最近入ってきた新人と、なぜおいしいか、なぜまずいかというのは、同じでしょ、という話になりました。原因を探そうよと。そうでないといつまでたってもわからない。

上記の例のように同じ話題のなかで同分類の発話や応答が現れる場合がある。

この時は【主観1】【主観2】のように数字を付した。特に話し手自身の考えの表明が連続した場合には、【主体的考え1】に至るシークエンスと同様に、【主体的考え2】に至るシークエンスを設定した。前者のシークエンスは、主観1—主観2—主体的考え1とする。後者のシークエンスは、主観1—主観2—主観3—主体的考え2とする。ある発話の連なりが二つの意見表明に結びついたということである。話し手の「主体的考え」は、4章で述べた3分類（「定型の語り」「言葉を探す」「主張を生成」）のうちのどれに該当するかもコーディングしておく。

5.2 発話シークエンスの構造分析

発話シークエンスがどのような発話の連続で構成されていくのか、どのようなシークエンスがどのような話し手の応答を導くのかを明らかにするため、本研究ではジャカード係数を用いて発話と応答の共起関係を分析した。前節の手法で、1回2時間強、全3回のすべてのインタビュー内容から、発話シークエンスをすべて抽出し、共起分析のデータとする。ひとつの発話シークエンスに属する、話し手のすべての発話内容、及び聴き手のすべての発話技法は互いに共起するものとみなして分析を行った。図1は共起分析の結果を図示したものである。聴き手の発話の名称は表1、話し手の応答の名称は表2に対応するものであり、共起関係が高いものにペアに線が引かれている。ジャカード係数が0.14以上のものに関しては、数値を付記した。話し手の主体的な意見3種類と共起する発話シークエンスを実線で、不発に終わることの多いシークエンスを点線で囲った。

5.3 経験的方法論の検証

この発話シークエンスを用いた分析から、従来言われてきたオーラル・ヒストリーメソッドにおけるいくつかの経験的方法論を検証することができた。

まず、政治学・経済学系のオーラル・ヒストリーで言われてきた、聴き手の主観を抑えて客観的な情報を提示することで話し手から価値中立的な事象を引き出すことができるとする経験則（政策研究院政策情報プロジェクト、1998）を検証してみたい。

この発話に該当するのは、図1中の「客観1」「客観2」（客観的な意見の提

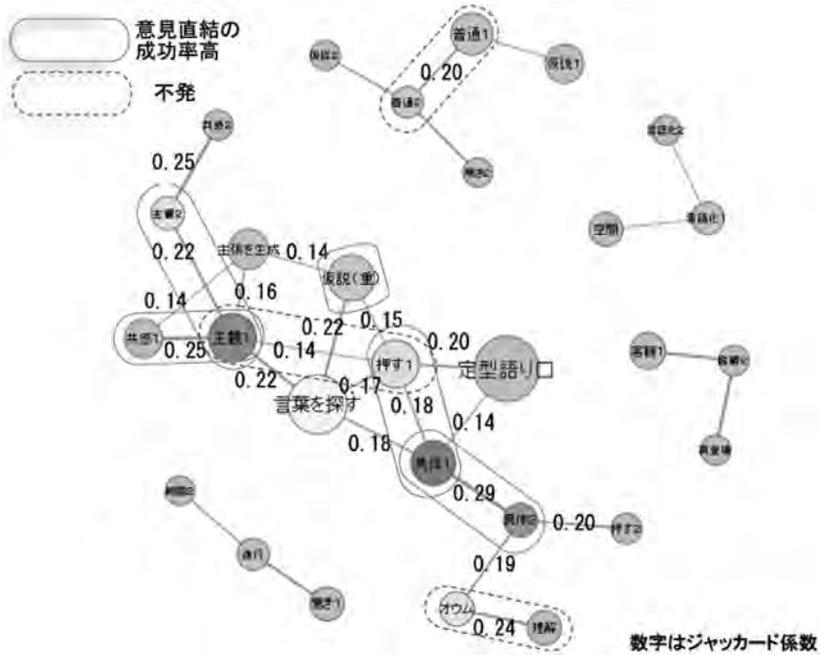


図1 発話と応答の共起関係

示)である。「空間」(空間を連想させる)や「時間」(時間／歴史を連想させる)も客観的な情報の提示として行われる場合が多い。この4つの発話が結びつく先を見ると、それらはいずれも他の発話とのみ結びついており、話し手の主体的な意見表明(「定型の語り」「言葉を探す」「主張を生成)には結びついていない。本研究では、話し手の意見表明がある応答のみを取り上げた。これと結びついていないということは、すなわち、これらの発話は今回摘出していない、話し手の特徴的な考えが入らない応答に結びついているということになる。客観的な情報提示は価値中立的な語りを引き出すという経験則は、逆説的ではあるが妥当しているとみてよいだろう。

次に、仮説の提示はどうだろうか。オーラル・ヒストリーでは、話し手の持つストーリーをありのまま引き出すことを重視するため、聴き手の側が仮説を提示して語りの方向性を誘導する、もしくは大きな影響を与えることは

避けるべきという考えが主流であり、これを許容しようという考え方とのあいだで議論が行われてきた(例えば、トンプソン, 2002)。

これに該当する聴き手の発話形態は「仮説」であるが、図のうち「仮説1」「仮説2」いずれを見ても強い共起関係にあるのは「普通の質問」であり、主体的な意見表明(「定型の語り」「言葉を探す」「主張を生成」)のどれにも結びついていない。聴き手の側が練られていない仮説を不作法に出したとしても、話し手の意見表出には結びつかず、無味乾燥なやりとりが続くことがわかる。

もうひとつ、どの方法論でも重要視されてきた傾聴マーカー(桜井, 2002)について考えておきたい。通常、傾聴マーカーは顔きや相槌など身体的なものを指すが(川名, 1986)、本研究では2章で述べたとおり、雰囲気を作ることを目的とした発話を重視した。これも傾聴マーカーに類するものであり、記録が難しいため分析対象とすることの難しかった「傾聴」を測定する方法となる。図1中では「共感1」「共感2」「理解(理解したと示す)」であり、それに準ずるものとしてさらなる語りを促す(雰囲気に乗って押す)「押す1」「押す2」「オウム返し」も含めてよいだろう。

それらはいずれも話し手の考えを述べる「定型」「言葉を探す」「主張を生成」に結びついている。つまり、傾聴の姿勢が具体的に発話によって示されることで語りが深まり、話し手が自らの主張を述べやすい環境が作られていることがわかる。

5.4 意見を引き出す発話シーケンス

では、話し手の意見を引き出すことのできる発話シーケンスはどのようなものなのだろうか。共起分析の結果から見えてくるのは、「具体(具体物を提示) — 「押す」(雰囲気に乗って押す)、「主観」(主観的な意見) — 「共感」(共感を示す)、「仮説(重要)」が発話に直結するという3つのシーケンスである(図2)。

第一のシーケンス(具体 — 押す)は、具体例を挙げつつ話の進行を押す(サポートする)ものであり、「定型の語り」もしくは「言葉を探す」という話し手の意見表明に結びついている。第二のシーケンス(主観 — 共感)は、聴き手の主観を話し手に対する共感と織り交ぜながら話を進めるもので、「言葉

を「探す」、「主張を生成」という定型の語りを破る意見表明を引き出している。重要な仮説をぶつけるという第三のシークエンスも第二のシークエンスと同じ結果をもたらしている（表3）。

この結果から導き出される知見はきわめて興味深い。すわなち、伝統的なスタンダード・インタビューでタブー視されてきた聴き手の主観の提示が、定型の語りではなく、その場で言葉を探したり、主張を生成する過程を引き出すことである。定型の語りが得られるだけではインタビューは成功とはいえない。何度も語るなかで美化され、整備された定型ではなく、「言葉を探す」「主張を生成」というかたちで意見を導きだすことにオーラル・ヒストリーの本領があることはすでに述べた通りである。

この知見はふたつのさらなる考察をもたらしてくれる。まず、話し手に主体的な認識を語ってほしいと考えるのであれば、聴き手の側も主体的な見解を示す必要があることがわかる。これは従来提示されてきたタブーを全面的に覆すインプリケーションを持つと同時に、インタビューによる記憶の「共同想起」が行われるという議論も裏付ける（有末，2012）。社会心理学などでしばしば言及される返報性の概念（Becker, 1998）に該当するエビデンスであると考えられることできるだろう。

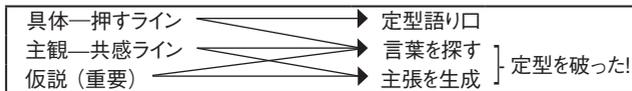


図2 意見を引き出す発話シークエンス

	意見を引き出す	不発	出現合計数
主観一主観	10(44%)	13(56%)	23
主観一共感	13(65%)	7(35%)	20
主観一押す	7(37%)	12(63%)	19
具体一具体	11(61%)	7(39%)	18
具体一押す	8(67%)	4(33%)	12
普通一普通	5(42%)	7(58%)	12
オウム一理解	3(75%)	1(25%)	4
仮説 (重要)	28(62%)	17(38%)	45

表3 発話シークエンスの成功率

一方で、聴き手から提示された主観を受けて話し手が考え込むことは、話し手が強く聴き手の感覚に影響を受けた語りを行う危険性も示唆している。この意味においては、むしろ従来からの禁忌が改めて認識されるのかもしれない。これに関しては、次章で詳しく論じる。

聴き手の浅い理解から発せられた仮説が、無味乾燥なやりとりしか生まないことはすでに述べた。それに対し、対話のなかで話し手に寄り添い、練り上げられたうえで示された「重要な仮説」は、話し手の非定型の意見をダイレクトに導きだす効果があることが共起分析から見いだせたことは、特記すべきだろう。すなわち、聴き手による仮説の提示は一概に否定されるものではなく、話し手の主張に寄り添った仮説を、聴き手がいかにして提示することができるのかがその成否を握る。

では、重要な仮説はどのようなシークエンスのなかで生まれるのだろうか。本稿ではその答えを見つけることはできなかった。図1から明らかなように、重要な仮説は、他の発話と明示的な共起関係を持っていない。つまり、重要な仮説を導きだす典型的な発話シークエンスは見いだせなかった。重要な仮説と共起が高い発話は「押す」(雰囲気に乗って押す)のみである。「押す」は「雰囲気をつくる」に属する発話であり、「話を展開させる」発話とペアになって初めて意味をなす。逆にいえば、重要な仮説に連なる発話シークエンスは存在しないということなのかもしれない。これは発話シークエンスの分析ではなく、話し手—聴き手のコミュニケーション関係構築における発話の内容・意味分析を行うことで検討すべきものだろう。

6 全体の流れを捉える

聞き取り全体の流れについても貴重な二つの知見が得られた。まず、話し手の発話内容の傾向が時間が重ねるにつれて見せる変化である。

図3はスクリプトのページ数を横軸に取り、各回の話し手の発話のうち、意見評価(事実を含む)と話し手の考え(ライフストーリーにおける人生や仕事に関する哲学)の表出数の推移を示したものである。一見して明らかなのは、回を重ねるごとに提供される内容が豊富になっていることであろう。

第一筆者・清水は、それまでのオーラル・ヒストリーの経験から、3回目に

聴き手と話し手の邂逅が訪れるという感覚的知見を持っていた。これを第1回は様子見、第2回はある種の緊張の緩みがあり、第3回にいたって聞き取りの目的と双方の語りのスタイルが共有・摺り合わされるためと考えてきたが、それがある程度裏付けられた。翻っていえば、オーラル・ヒストリーは3回以上続けることで、より深い語りにつなげることができるということになる。初対面の際には返報性への期待が高く(大坊, 1973)、あまり親しくない関係のなかでは類似した形態の応答が行われるという指摘(小川, 2012)は、主観を提示したオーラル・ヒストリーが両者の関係を接近させ、有効な対話を促すことを示唆している。

もうひとつ、意見評価(事実を含む)がある程度出てきたあとに、話し手の考え(哲学)の表明が続いていく傾向も見出される。図3でいえば、実線(意見評価)の山のあとに点線(哲学)の山が続いていることが確認できる。まず事実や評価について話すと、考えを語る素地が作られるとみてよいだろう。これは聞き取りの方法を考えるうえできわめて示唆的な結果であった。

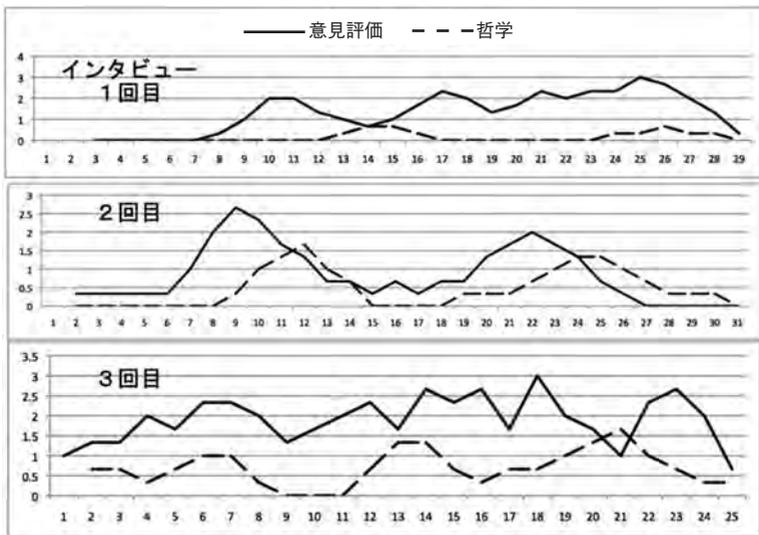


図3 話し手の発話内容の変化

7 全体考察：本来性を損ねない担保の下での積極的介入

聴き手が主観的に意見を述べたり、共感したり、具体的に話して欲しいトピックを提示したり、話を後押ししたりすることは、従来インタビュー研究では「誘導的介入」としてタブー視されてきたことはすでに述べた。ホルスタインらが示したアクティブ・インタビューの考え方（ホルスタイン, 2004）はそれに対するアンチテーゼであったが、本研究の結果は彼らの主張を裏付けるものとなった。

認知科学の一分野に学習科学という研究領域がある。80年代の後半から、協調学習という概念の一般性が盛んに論じられてきた（例えば、三宅, 2008）。ひとは本来他者と交わり影響されて学ぶものである。聴き手が話し手のよき相手として主観的な意見や具体的トピックを示唆することを「誘導」と解釈するよりも、話し手の学びにつながる意見交流であると解釈する方が生産的であると第二筆者・諏訪は考えている。ホルスタインも、インタビューとは話し手と聴き手の相互行為であり、ナラティブをつくりだす共同作業であると述べている。

昨今、認知科学や人工知能の研究分野では、従来型の自然科学主義ではなく、構成的科学の思想でひとの知性を捉えるべきであることが叫ばれ始めている（諏訪 et al., 2013）。ひとの生の営みの時間を止めて分析するのではなく、刻々変化する現在進行形の学びを構成的に創出しながら分析することこそ、「生きているひと」の分析のあるべき姿であるという考え方である（永井 et al., 2010）。この観点に立てば、インタビューとは、話し手の心の奥に潜む意識内容をそっとそのままの形で抽出する行為ではない。むしろ話し手も積極的に意見交流を行い、ナラティブをその場で共同でつくりだすことが構成的な科学思想に立脚するインタビュー技法であろう。本研究の分析結果は、その考え方をサポートするものとなったと言える。

とはいえ、聴き手の仮説提示や主観的意見の提示は、話し手を「誘導」することにはなる。それを、われわれは以下のように考える。たしかに一時的には「誘導」が生じるかもしれない。しかし、本研究のように、短時間一回ではなく、長期に渡って密なインタビューを行えば、話し手は一時的な「誘導」から自分の「本来性」を取り戻すのではないか。ひとは、各々自分の生を生

きているのであるとするならば、長期間にわたって誘導されるものではないのではないかと。現在は個性や感性を大切に作る時代であり、自分らしさとは何かを探究することへの社会的関心は高い。自分らしさを追求する過程において、他者からの誘導は新しい着眼点を学ぶ契機になることもある(諏訪, 2013)。

本人が自分らしさに合致すると思えば、一時的な誘導はもはや誘導ではなくなる。また身体性の概念(諏訪, 2013)によれば、本能や身体が受け付けられないような誘導は、結局、自分らしさの追求において採用されないことが予想される。自分らしさに根ざした、本人が考えるところの「あるべき姿」のことを「本来性」と称するなら、本研究の結果は、ひとの本来性を最終的に損ねないような時間的猶予を与えつつ、途中で一時的な誘導になろうとも、聴き手は自分の人間性や主観を開示しつつインタラクティブに交流することのメリットを示唆している。

8 おわりに

以上、本稿では、聞き取りを聴き手の質問だけでなく、聴き手と話し手双方の関係性から分析することを企図して、発話シーケンスを用いて、対話の構造を具体的に捉えることに努めた。その結果、次の知見が得られた。

第一に聴き手の主観と話し手の語りの関係である。これまでの経験的な方法論で言われてきたとおり、主観を押さえて客観的な事象を提示した場合には話し手の発話も事実の提示となること、聴き手が主観を織り込んで発話した場合、話し手に対する共感が示されていれば、話し手は自らの考えを語る事が実証された。

しかし、これは一概に従来のインタビューの方法論が提示した主観の抑制の否定にはつながらない。むしろ聴き手は自らの主観を出す、出さないという選択をすることで、話し手の発話をより客観的な事実に基づくものか、より主観的な考えを含むものにするかをある程度調整できることを示している。翻っていえば、それに自覚的であれば効果的な聞き取りが行えるし、無自覚であれば目的にそぐわない結果に終わるということである。

第二に、仮説の提示に際して、聴き手はきわめて慎重にならなければなら

ないことが改めて明らかになった。聴き手は、話し手の語るストーリーに対して何らかの仮説を提示して語りをさらに豊かなものにする誘惑に駆られるものだが、ほとんどの場合、そうした仮説は空振りに終わり、語りを阻害するだけであった。

これまでの方法論でもストーリーの重視ということが強く言われてきたが、その主張を支持する結果が得られた。他方で、十分に話し手のストーリーに寄り添い、練り上げられた仮説の提示はきわめて貴重な話し手の考えを引き出すこともわかった。頷きや相槌に代表される傾聴マーカーの重要性についても、本研究では共感、話の流れに乗って押すと言った観察可能な発話の効果から意義を明らかにすることができた。

第三に、第一筆者が経験的に感じてきた、聞き取りは3回目で邂逅を迎えること、すなわち3回以上行うことで聴き手と話し手の関係性が充実し、豊かな語りが得られることも語りの質的变化から裏付けられた。これは政治学、経済学分野のオーラル・ヒストリーでもライフストーリー型で時間をかけること、政治的、経済的に重要なトピックのみに絞って聞くのではなく、話し手の人生全体を聞くことに有意があることを教えてくれる。聴き手のインタラクティブな介入(主観提示や仮説提示)は一時的な誘導になるかもしれないが、ひとの本来性を損ねないような時間的猶予を与えていれば最終的には自らの本来性を取り戻すという考え方からも、同じ話し手に複数回聞き取りを行うことが重要であろう。

もっとも、これらの知見は、現段階においては3回計6時間、あるレストランオーナーと筆者たちの聞き取りという一事例から得られたケーススタディに過ぎない。しかし、一人称研究の動向(諏訪 et al., 2013)にみられるように、ある固有名詞のひとの、ある状況下で得られたケーススタディ的知見のなかに、従来研究ではみつからなかった有望な仮説が見出せることもある。これまでのオーラル・ヒストリーは本研究のように発話の性質と対話の相互関係を分析する手法は取ってはこなかった。インタビューを対話とみなし、その相互関係を分析したからこそ、本研究では有望な仮説が得られたと考えている。

分析対象となりうるオーラル・ヒストリーの成果は無数にある。今後、分

析手法を洗練しながら、より多くのオーラル・ヒストリーの成果を対象として、本研究で得られた仮説の有効性について検討を進めたい。

謝辞

本稿は、第18回身体知研究会(於、千葉大学)での報告論文を当日の議論を踏まえて加筆修正したものである。主宰の藤波努先生をはじめ、有益なコメントをくださった皆さんに感謝申し上げたい。なお、本稿の一部は平成25年度科学研究費補助金基盤(C)「身体を考える生活を促す支援環境と生活意識の構成論的デザイン実験」(23611039)の助成によるものである。

注

- 1 2001年には政治学系の研究者によって政策研究大学院大学オーラル・政策情報プロジェクトが、03年には社会学系の研究者を中心に日本オーラル・ヒストリー学会が発足した。
- 2 たとえばオーラル・ヒストリー夏の学校(東京大学先端科学技術研究センター)、オーラル・ヒストリーワークショップ(日本オーラル・ヒストリー学会)などがその代表的なものである。
- 3 一人称研究とは、人工知能や認知科学分野で提言された、ひとを対象とする科学がどうあるべきかに関する模索的提言である。これまでの科学は普遍性や客観性を是としてきたが、それだけではひとの知性の探究には重大なことが漏れ落ちるといふ問題意識の現れである。主観的なデータを扱わないとひとの自覚的意識は扱えない。ひとの知性は、誰にでもどこでも生じる普遍的な現象だけがすべてではない。状況に依存して、また個人の固有性に依拠して生じる知性も探究すべきである。このような問題意識のもと、人工知能学会誌の2013年9月号には「一人称研究の勧め」という特集号が組まれている。
- 4 この聞き取りの成果は、リーダブルなかたちに編集し、小冊子として刊行した(松本・清水・諏訪, 2014)。

引用文献

- 有末 賢『生活史宣言—ライフストーリーの社会学—』慶應義塾大学出版会、2012年。
ヴァレリー・R・ヤウ、吉田 かよ監訳『オーラルヒストリーの実践と理論』インターブックス、2011年。
- 小川 一美『二者間発話量の均衡が会話者が抱く相手と会話に対する印象に及ぼす効果』『実験社会心理学研究』Vol.43、2012年、pp.63-74。
- 川名 好裕『対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼす効果』『実験社会心理学研究』Vol.26、1986年、pp.67-76。
- 桜井 厚『インタビューの社会学』せりか書房、2002年。

- 桜井 厚・小林 多寿子編『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房、2005 年。
ジェイムズ・ホルスタイン、ジェイパー・グブリアム、山田 富秋ほか訳『アクティヴ・インタビュー』せりか書房、2004 年。
- 清水 唯一朗「オーラル・ヒストリーの可能性—仮説の発見と実証—」『RSPSP Discussion Paper』No.4、2009 年。
- 諏訪 正樹「見せて魅せる研究土壌—研究者が学びあうために—」『人工知能学会誌』Vol.28、No.5、2013 年、pp.695-701。
- 諏訪 正樹・堀 浩一・中島 秀之・松尾 豊・松原 仁・大武 美保子・藤井 晴行・阿部 明典「一人称研究にまつわる Q&A」『人工知能学会誌』Vol.28、No.5、2013 年、pp.745-753。
- 諏訪 正樹・清水 唯一朗「本音を語ることを促すインタビュー技法に関する一考察」、人工知能学会第 28 回全国大会、2D4-OS-28a-1、2014 年。
- 政策研究政策情報プロジェクト編『政策とオーラルヒストリー』中央公論社、1998 年。
- 大坊 郁夫「二者討論における言語活動過程と顕現性不安」『実験社会心理学研究』Vol.13、1973 年、pp.86-98。
- 永井 由佳里・藤井 晴行・中島 秀之・田浦 俊春「特集「デザイン学」の編集にあたって」『認知科学』Vol.17、No.3、2010 年、pp.385-388。
- 忽滑谷 春佳・諏訪 正樹「創造思考のナラティブを創出するインタラクティブ・インタビュー」、人工知能学会第 26 回全国大会、1N2-OS-1b3、2012 年。
- 松本 和広・清水 唯一朗・諏訪 正樹「ひと×土地×仕事×街を語る(1) 湘南台の Pasta やさんニューオリンズ」慶應義塾大学生生活実践知プロジェクト、2014 年。
- 樋口 耕一「テキスト型データの計量的分析—2 つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』Vol.19、No.1、2014 年、pp.101-115。
- ポール・トンプソン、酒井 順子訳『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界—』青木書店、2002 年。
- 御厨 貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、2007 年。
- 三宅 なほみ「協調的な学習と AI」『人工知能学会誌』Vol.23、No.2、2008 年、pp.174-183。

- Becker, Lawrence C., Reciprocity. In E. Craig ed., *Routledge Encyclopedia of Philosophy*, Routledge, 1998.
- Burgoon, J.K., et al., *Interpersonal adaptation: Dyadic interaction patterns*, Cambridge University Press, 1995.
- Holtgraves, T.M., *Language as a social action: Social psychology and language use*, Lawrence Erlbaum Associates, 2002.

〔受付日 2014. 5. 21〕